

## 第1回「(仮称) 町田市北部丘陵活性化計画アクションプラン」検討委員会 会議録要旨

### 【会議日時及び場所】

日 時 2016年5月27日(金) 10:00~12:00

場 所 町田市役所 2階 2-2 会議室

### 【出席者】(敬称略)

#### ■委員

凶司 直也(委員長)、柳沢 厚(副委員長)、老沼 敬助、中丸 康明、市川 孝、田中 英夫、山崎 凱史、岸 由二、新井 英夫、間仁田 修、宮下 徹

#### ■事務局

荻原北部丘陵担当部長(途中退席)、北部丘陵整備課廣瀬課長、星担当係長、中川担当係長、伊藤主任

#### ■傍聴者

無し

### 【資料】

次第

(資料1) 町田市北部丘陵活性化計画アクションプラン検討委員会設置要綱

(資料2) 委員名簿

(資料3) 検討の趣旨

(資料4-1~4-3) 北部丘陵活性化計画に位置づけられた事業の進捗状況

(資料5-1, 5-2) 北部丘陵での活動の担い手と活動内容

(資料6) 座席表

### 【議事要旨】

- ・事務局より検討の趣旨、北部丘陵地域での事業の進捗状況等を説明した。
- ・委員より自己紹介を行った。

### 【会議内容】

#### 1 開会あいさつ

経済観光部北部丘陵担当部長より挨拶

#### 2 委員紹介

#### 3 委員長・副委員長の選出

#### 4 委員長・副委員長あいさつ

#### 5 議事

(説明)

- ・検討の趣旨(検討の目的、内容、スケジュール等)
- ・北部丘陵活性化計画に位置付けられた事業の進捗状況
- ・北部丘陵での活動の担い手と活動内容

上記について、事務局から説明

(意見交換)

- ・各委員から意見

## ■意見等

### 【配布資料に対する質問、進め方】

(委員)

- ・参考資料 2 の小山田地区のエリアが誤っている。大善地区が含まれていない。

(事務局)

- ・再度確認をする。

(委員)

- ・2時間の短い時間の中で意見をまとめることは難しい。もう少し議論する時間が必要である。

(委員)

- ・アクションプランのイメージがわからないため、この場でどのような議論をしたらよいかかわからない。

(事務局)

- ・本検討委員会では、総合的な検討ではなく、実効性のあるアクションプランを策定したい。重点事業を決める際に、地域の代表の方に意見を頂きたいと考えている。また、本検討委員会とは別に、地元の若い世代や女性からの意見を伺うために、意見交換の機会を検討している。

### 【自己紹介等】

(委員)

- ・北部丘陵活性化計画について、地域の方はきちんと理解していない。地域の意見が入っていない。地域活性化が進んでいない要因としては、地域の協力が得られていないからだ考える。緑を残すことに反対はしないが、農業で事業が成り立つ場所ではない。後継者もいない。

(委員)

- ・市街化調整区域に住んでいる。昭和 45 年に線引きがなされて以降、土地を売ることもできず、住宅ローンを組むことも難しい状態。下小山田町大善地区には現在 37 世帯いるが、20~30 年後には 1/3 となる見込み。市街化調整区域のために道路の拡幅がされることがなく、子世帯が家を構えることも難しい。他の地域から訪れる人でこの地域に住みたいと希望する人はいるが、市街化調整区域のため住むことができない。地元の人が代々住めるようにしてほしい。

(委員)

- ・小野路に住んでいるため、小山田地区の問題を知らない。この会を通して何が問題なのかを把握し、課題をつぶしていく必要があると考えた。これまでの開発を踏まえて、どう取り組むのか、様々な関連団体の活動をもっと活性化するのか、出て行ってもらうのかという考え方もある。七国山の様に、菜の花、そばなど地域を PR できるものがあるとよいのではないか。その際には、人を集客するためにも道路の整備は必要になるだろうと考える。

(委員)

- ・UR から買い取った市有地も地域の資源として見るべきで、地域のことは地域が守っていくスタンスが大事だと考える。市に頼ってばかりではなく、自分たちが地域でお金を作り、まわしていくことを考えたい。
- ・一方、現在我々が市有地で実施している取組み「つつじの里」では、地域がやる気になって活動しても、市のサポートを感じられない。市が「これはいい」と判断した活動を市が育てていく姿勢が大事である。
- ・もう一点、私は遊歩道計画ができたならよいと考えている。その時、小田急多摩線延伸の駅周辺の土地利用等、集客の手段については先行して考えるべき。

(委員)

- ・里山交流館ができたことでよかった点は、地域の活性化につながったことである。地域の農家の農産物がコンスタントに売れるようになり、スタッフは30人雇用できるまでになった。集客できるようになり、町田市にとっても少なからず効果が出ている。小野路は筍が有名で、PRしなくても筍の時期は店頭に出すとすぐに売れてしまう。こうした、地域の野菜等を売る場所は大事だと感じる。北部の丘陵地域の中に何箇所か拠点を作り、それぞれ地域の特色を出してやったらよいのではないか。市はあくまで援助のみで、地域が主体となってやるということが重要である。アクションプラン策定のための検討委員会ではあるが、実際に実行するのは、地域や活動団体の方。アクションプランができるか否かは、委員のみなさんが地元でどれだけ発言し、賛成してもらえるかに懸っている。
- ・今は里山交流館の運営で手いっぱいだが、地域主体で、竹林・里山を管理しながら筍を加工・販売し、利益を上げる仕組みを考えていきたい。

(委員)

- ・放置すれば危険な緑になる可能性も高い北部丘陵の緑地を安全で魅力的な緑として管理していくことは喫緊の課題である。町田市は20年30年先を見据え、北部丘陵だけでなく多摩丘陵全体をどうするかを考えなければならない。例えば近郊緑地特別保全地区に指定できれば、土地の買い取り制度があるはずだ。
- ・現在、NPOで鶴見川源流の整備・保全活動を行っているが、様々な規制により自分たちで活動資金を作ることができない。市有地でとれた筍を売りたくても売れない、植林したくても地目が農地のため抵抗がある等、規制が厳しい。地域自らが稼ぐことを許す条件整備や規制緩和ができれば、観光や学習支援等、やろうと思ったら今すぐにでもできる環境にある。活動が多様化できれば、就労の場にもなる。お金が集まれば、地域の活性化につながる。
- ・保管理に必要な資金を稼ぎ、何人雇用できるかというような点にこそ着目し、地域ごとの特性や条件にあった、実行できるアクションプランにする必要がある。

(委員)

- ・奈良ばい谷戸には植物好きな人がよく来訪する。たくさんの人に来てもらうために専用駐車場がほしい。バスは1時間に1本しかないため、バスの本数増やしてほしい。そうすれば、

散策のコースも増えると思う。

- ・まちだ結の里のホームページはあるが、検索でヒットしにくく、更新もなかなかできない状態である。花の咲く期間は短いため、町田市のホームページでこまめに情報を更新してもらいたい。

(委員)

- ・観光コンベンション協会では町田市を案内するガイドを育成し、現在ガイドが30人くらいいる。町田市内は私有地が多いため、トラブルが起きないようにガイドが案内するのが良いと考えている。現在は、鶴見川源流ツアーや町田市の境界をめぐるツアーが人気で、40～50人／回集まる。
- ・町田に住む人が町田を知らないため、町田の人向けに町田を知るツアーを企画していきたい。都市近郊の町田の自然や小山田与清や高田早苗、良寛のゆかりの地である田中谷戸のツアーによって他の地域も含めて活性化できたらと考えている。町田市の特徴は自然と共生しているまちであることと思っているため、自然を荒らすことなく地域をPRしていくことが大事と考えている。

(委員)

- ・町田市農業協同組合は地元農家とのかかわりが強い。昔から住んでいる人が代々その土地を継承できることを考えたうえで計画を作成せねばならない。農業で食べていける様にするには、農と緑の公社が検討したような面整備で大きな青果場をつくり、都内に野菜を出荷するような体制をつくらなければ難しい。その場合は人が通れる道路の整備も必要である。
- ・荒廃している市有地は、所有者として市がしっかり管理すべきである。民間に頼ってやってもらうのは間違っている。北部丘陵の課題として、耕作放棄地が多いと参考資料3で示されているが、民有地の耕作放棄地はそれほど多くないのが現状ではないか。もう少し市の方で力を入れてもらわないと、地元の方々は動かない。

(委員)

- ・5年前、北部丘陵活性化計画を策定する際に、検討のお手伝いをした。その時に考えたことは以下の3点であった。  
まず1点目は、大都市に残された北部丘陵の緑は貴重であることで、自然の価値を高め育てるためには何ができるか考えること。  
2点目はアクセス条件など、活用の可能性を高めるためには何ができるかということ。当時はお金を生み出す仕組みについては真剣に議論できなかった。  
3点目は、居住者の居住を継続するという条件の確保であった。道路整備ぐらしか書けなかったが、「市街化調整区域だからできないことがない」と考えるのではなく、市街化調整区域でもできることをもう少し詰めて考える必要性を改めて感じた。
- ・アクセスに関しては、多摩ニュータウンとの連携も考えねばならない。多摩ニュータウン側からのアクセスが難しくなっているため、広範囲で人が動ける状態のアクセス条件をあげていくことが大事だと考える。

(委員)

- ・社会情勢に翻弄されながら住み続けている方々の思いを率直にお話しいただいた。印象深かったのは、地域の方は「次世代に向けて担い手をつなげていきたい」「住み続けたい」と諦めていないということは大事であると感じた。地域に寄り添うためのアクションを早く打った方が良い。
- ・自分の土地に対してならば、青写真が描けやすいところがあるが、土地の所有者が移っていったりなど複雑にからみあっているところが、「なんとかしたいがなんともしがたい」という思いを倍増させているように感じた。決して市有地だから地元の人には関係ないと思われてはいなく、そこを含めなんとかしないと地元のみなさんが前に進めないというもどかしさを率直にお話しいただいた。
- ・活動されている団体のみなさんからは、「ポテンシャルが高い」というお話をいただいたと思う。岸委員からはポイントになるのはお金の稼ぎ方と教えていただいた。稼ぐルートは農産物、既にアプローチは見えているということで、農をベースにした稼ぎ方、アレンジを加えながらやれるとすると可能性があるのではないかと。稼ぐというのは、住み続けることなので、そのこのところをアクションプランの中で際立たせていくのが大事なところである。

(委員)

- ・私は、「小山田の筍とか自然の産物を農家が収穫して売れ」と言ったのではなく、「NPOが今は切っ捨てているだけなので売ればよい」という意味である。すでに大規模な公有地化がすすんでいる小山田は、中山間農業の促進が主要なテーマになるような場所ではない。「のどかな里山を応援する」ということではなく、「緑が生み出す農産物をNPOが売って稼いで、そのお金で防災・地域再生にも資するような緑地管理をする」。そんな都市的なことを本格的にすすめることのできる場所だと思う。
- ・小山田の場合、専門的な農業はすでにほぼ崩壊している。市街化調整地域の中にとどまっている市民が、緑で食べてゆくこともできず、市民的な居住を拡大することもできず、土地を高く売って出ていくこともできない。町田市やボランティアが農業をどう応援するかということが主要な課題なのではない。

(委員)

- ・現場を歩かせていただいて、率直な意見をいただければと思う。不勉強なところはあるが、お金を回していく仕組みにしても、岸委員からいただいたNPOを挟んでいく等考えていきたい。

(委員)

- ・町田市は、ミニバスをつかった観光だとかウォーキングだとか、すぐできることを、なにもやっていない。

(委員)

- ・やれることはいろいろあると思う。地域の皆さんの思いをくみ取って、一緒にやるという場づくりが1番大事である。おそらくみなさん方の総力戦で実行していくことになる。事実認識などいたらないところはあるが、事務局に持ち帰って次回論点を組み立てていきたい。

【その他】

(事務局)

- ・第2回検討委員会は、7月1日(金)10:00～、第3回検討委員会は、8月18日(木)10:00～開催したい。

以上